ブックレビュー

『人類はどこで間違えたのか～土とヒトの生命誌』
中村桂子　著
中央公論新社　刊
定価 1,100円（本体 1,000円＋税）

「人間は生きものである」という当たり前の事実から出発し、「このままでよいのだろうかと思う日々」を「生命誌的世界観」から問う。幅広い知見が平明で、「レジェンド研究者の集大成」と謳うキャッチがうなずける。

肩の力を抜いた自然体は、間もなく90代を迎える著者の心境を映し出しているのかもしれない。「私が暮らしたい社会、子孫につなげたい社会とはかけ離れ」、人間のあり方が根源から問われているような事態が、この地球上に広がっているからこその刊行だ。

著者は「機械論的世界観」が大手を振るう科学技術文明に疑問を抱き、独自の「生命誌」を構想して「JT生命誌研究館」の創立に携わった生命科学者だ。「生命誌」とは著者によれば、進化する科学技術を活かして「生きものである人間としての本来の道を探す」こと。本書はそうした生命・世界観から、「生命40億年」「ホモ・サピエンス20万年」「土への注目」の３部構成で人類の歩みを辿る。

キーワードは「『私たち生きもの』の中の私」。宇宙の中に地球があり、地球には様々な「生きもの」がいて、その中に含まれる人類に日本列島人がおり、学校や職場や地域の仲間が、さらには家族がいるという「私」の存在にとって、「他人事はどこにもない」と説く。

そのために東西の知見を動員し、人間の身体・言語・芸術・宗教・風土などに言及。さらには「アニミズムの現代的意味」（自然と人間との間の互酬関係）から富の蓄積を唯一の評価基準とする交換経済（金融資本主義）に疑義を呈し、その先に「土に注目する環境再生型農業」の可能性を見据えている。「思いはあるけれど、考えはまだまだ」と著者自身が記す意欲的な〝鶴翼の構え〟からは、現代人の生き方を問い直すヒントが拾い出せる。

（山海野（さんかいの）　玄（げん））